

特報

第84回箱根駅伝 総合7位

(08年1月2～3日)

「ハコネ」を絆に結ぶ 「オール中央」

全ドキュメント

真紅のタスキをつないだ
10人のランナー十付き添い

正月の国民的スポーツイベント、「箱根駅伝」一。数えて84回。
新春1月2、3日、「伝統」ある真紅のタスキが箱根路をひた走った。
往・復路全217.9キロの沿道は、「ちゅうおう」の声援リレーで揺れた。
結果は、体調不良者が相次ぐなかでの総合7位。悔いは残る。
だが、万全でない状況下で10区10人のランナーは伝統校の底力を発揮した。
取材でみえたのは、表舞台のランナー十舞台裏に回った付き添いのサポート。
そして「ハコネ」に熱く燃えるOBらの献身的な支えだった。
「優勝」一を絆にした「オール中央」のもうひとつの“タスキ”がそこにあった。

学生記者取材班

△東京・大手町・読売新聞社前▽

(1区東京へ鶴見21・4キロ)

1月2日午前6時半。新春早曉の
清新なヒンヤリした空気が身を引き
締める。吐く息が白い。皇居に程近
い千代田区大手町の読売新聞社前。
月の残影を背に、少しずつ夜が白み
はじめてきた。間もなく夜が明ける。
学生記者(以下、記者)の山崎と
駒田は、これからはじまるドラマに
期待を膨らませていた。「第84回東
京箱根間往復大学駅伝競走」、スター
ト地点に張られた横断幕に自然と胸
が高鳴る。

すでに日本テレビの中継車がスタ
ンバイ。その周りをスタッフが準備
にあわただしく動き回っている。読
売新聞本社正面玄関前に設けられた
公式プログラムはじめ駅伝グッズの
売り場には、早くも人だかりができ
ている。

大きく鼓動する大手町一帯

空気が異様に感じる。大手町一帯
が大きく鼓動しているようだ。

山崎と駒田は、スタート地点から
やや離れた日比谷通り沿いにある日

本郵船本社前の中央大学に指定された応援場所に移動した。いつの間にか沿道に人の数が膨らんできた。各校の応援団も準備をはじめている。

東京・丸の内このあたりは、世界有数のビジネス街。正月休み2日の早朝だというのに、行き交う人の数は平日の数倍、人をよけて歩かねばならない。

中大の応援団、チアリーディング、ブラスバンドの面々はすでにそろっていた。

「5時半ごろから準備をしています」と応援団副団長の江口幸太(法3)。「1、2年のときは必死に先輩のサポートをされていて、あつという間に終わっちゃった印象しかありません。今年は団長をサポートして全力で頑張りたい」と力強く宣言した。

チアのリーダー、高見由里子(経4)は「中大が去年よりもよい成績がとれるように、しっかりと声を出して応援します」と誓った。

「いつも道路や山道を一生懸命走っている陸上部の選手を寮から見ているので、頑張つて欲しい」と江口。1週間前から応援団員は3人ずつ交代で、南平寮で駅伝チームと夕

食を共にしてきた。チームと応援団が一丸となるための箱根駅伝恒例の行事である。

のぼりづくりは

『箱根駅伝を強くする会』

7:00 スタート1時間前。応援団、チア、ブラスバンドが一齐に合同練習Ⅱ写真Ⅱを始めた。「都心



の今朝は、今シーズン1の冷え込みです」とラジオが伝える。しかし、寒さを吹き飛ばす熱気で、ブラスバンドが演奏する校歌を、応援に来た人たちがみんなで歌う。

★ ☆ ★ ☆

その中に『箱年駅伝を強くする会』副会長の上岡君義さん(昭和29年法



卒)Ⅱ写真Ⅱがいた。会はこととして結成20年を迎える。会員は約1100人。毎年、箱根に1泊して駅伝を応援しており、ことは17人が参加。「4月には新入生歓迎激励会、12月上旬には全選手の激励会や懇親会、それに年5回ほど合宿訪問もしています」と上岡さん。

白地に『中央大学』と赤く染め抜いた箱根駅伝応援の「のぼり」をこの会が資金を出し合ってつくっているのはあまり知られていない。中央大学の応援小旗も用意する。「昨年末に横浜から小田原までの各支部に配っておきました」と応援態勢に熱

が入る。

『強くする会』会員には若い人と女性が少ない。上岡さんは「中大がハコネの上位に来れば増えるのでしようね。少しでも若い人に入っていたらいい、この会を守ってほしいです」と願う。(『箱根駅伝を強くする会』への問い合わせは、電話03-5624-0020)

★ ☆ ★ ☆

記者の駒田は、スタートを前に次第に緊張感が高まる読売新聞社前に戻った。午前7時を過ぎると周辺は一段と賑やかになってきた。

タスキには駅伝全部員の名前が

7:25 スタート地点付近で1区山本庸平(経2)をみつめた。

ウォーミングアップから帰ってきた模様だ。「頑張つて」と声をかけると、振り向いて軽くうなずき、控え室がある読売新聞社の中へ入って行った。各大学の監督が読売新聞社の通用口から本社内に入って行く。

7:40 中大の田幸寛史監督が出てきた。山下善弘主務(法4)

と共に運営管理車へ。

7:53

選手確認を終えた山本が、応援にきた私服姿の友人達とリラックスした表情で笑顔を交えながらおしゃべりをしている。

「スタート5分前」のアナウンス。5分前からスタート時間までは1分ごとに残り時間を伝えるアナウンスが流れ、それにつれて周辺のざわめきも大きくなっていく。

山本が付き添いのチームメイト花蘭温(商2)に短く「じゃー!」と言ってスタート地点へ向かおうとすると、花蘭が「水、みず」とペットボトルを差し出す。山本は無言で水を飲むと、スタート地点へとゆっくり歩いていった。

真紅のタスキが山本の肩にみえる。タスキには40余名の駅伝部員全員の名前が書かれてある。12月31日にチーム一丸の心をこめて、みんなで書いた。

7:59:55

カウントダウンがはじまった。「5、4、3、2、1」、「スタート」のアナウンスと同時に、関東学連選抜を含めた20チーム

8:00

20人の選手が勢いよく飛び出した。「超戦国駅伝」の幕が切つて落とされた。気温5度、晴

れ。選手には日差しが強く感じられそうだ。

「中大、山本君もいいですね」と瀬古さん

間もなく日本郵船前に構えた中大応援団の前を選手が1団となって通過。目の前を通る山本に声をかけた応援団員はその場にとどまっていられずに、走る山本を何メートルか追いかけながら声を張り上げた。「頑張れ山本!」。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

記者の山崎は、このあとJR東海道線で往路「ゴール地点の箱根・芦ノ湖まで向かう予定にしていたが、『箱根駅伝を強くする会』がチャーターしたバスに、思いがけず「相乗り」させてもらえることになった。

車内のテレビで選手を応援しながらの箱根への道程だ。隣に座ったOBから、おまんじゅうを出され、ビールを勧められる。もちろんビールはお断りしたけれど、ビツプ待遇だ。

「庸平頑張れよー!」。車内でも名前を叫んで応援する。「くじけちゃいけないマラソンは…」と歌いだすOBも。しつかり応援し、そして駅

伝を楽しんでいる。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

山本の序盤の走りは順調だ。レースは比較的ゆっくりしたペースで進む。1区前半のヤマ場、八ツ山橋の上りをはじめた後も選手は1団のままだ。12キロ、14キロを過ぎても変わらない。

山本は道路中央寄りをキープし、やや首を振りながら、リズムよく走る。15キロの給水ポイント。山本は右手を上げて給水係の石井文崇(経2)に合図、無事給水した。

16キロすぎ、ひと固まりだった集



1区・山本庸平

団が崩れた。東洋・大西智也が前に出て、集団がタテ長に。山本は先頭集団について行く。六郷橋の上りで、先頭は関東学連選抜の国学院・山口祥太にかわる。山本は5、6番手で食らいついでいる。

「中大、山本君もいいですね」と、日テレ中継1号車に乗った瀬古利彦(日本陸上競技連盟理事)が解説する。

トップと5秒差の5位

20キロ、先頭集団は12人ほど。大混戦だ。山本もいる。残り1キロを切り、山本がタスキをとった。表情からみて、まだ余力はありそうだ。

東洋・大西がラストスパート。城西・佐藤直樹が前に出た。そのまま佐藤が1位で2区走者にタスキを渡した。最後まで先頭に食らいついでいた山本は、1時間4分42秒で5位。トップとの差はわずか5秒。チームに勢いがついた。

〈鶴見中継所〉

(2区鶴見〜戸塚23・2キロ)

鶴見中継所には、記者の池内が日の出前から陣取った。早朝は冷え込み、吐く息の白さが目立つ。夜が明け、

『明日へ走る』という箱根駅伝のモニュメントが目にとまる。

7時をすぎて、2区走者徳地悠一（法3）らが中継所に姿をみせた。近くの公園にテントが張られ、選手たちの待機場所になっていた。テントにはそれぞれ大学名がA4の紙にコピーされて張られている。池内は「中央大学」の名前を見つけて中に入った。

真ん中には大きな暖房機具。荷物番をしていた付き添いの橋本雅史（経3）に話が聞けた。「僕を入れて3人来ています。今日は思ったよりも暖かい。付き添いは選手の荷物を持ったり、選手がして欲しいことがあればやってあげたりします」。

付き添いに誰がなるかは、その区間を走る選手の指名で決まる。気心を通っている方がよいからだろう。付き添いが用意するのは、マット、毛布、ベンチコート、ワセリン、水、うがい薬、トイレットペーパーなどが必需品だ。

中継所でエントリー走者に付き添う係とは別に、指定された給水ポイントで選手を待ち受けて、水を渡す給水係やタイムを知らせる係もいる。

そろって駅伝チームだ。

体調崩していた2区徳地

徳地はこの日、水越智哉（文2）からエントリー変更された。中継所に姿をみせた小栗忠・陸上競技部監督は「徳地の体調が十分ではなかったから水越でエントリーしておいたんです。実力で言ったら徳地になるのが順当です」と話した。

徳地は10日ほど前に、感染胃腸炎を起こし、体調は万全でなかったのだ。

小栗監督と徳地がスタートした1区山本の走りを見守って何か言葉を交わしている。山本は順調な滑り出しを見せていた。それを確認し、徳地は軽く体の筋肉を伸ばし始めた。

8:15 ストレッチ後、徳地がアップを開始。あとで分かったことだが、徳地は昨夜は「8時に布団に入って、11時まで寝付けなかった」らしい。

8:32

テントのある公園から中継所までの間にテープが張られ、一般通行禁止になった。選手たちはテープが張られた中で着替えをして準備を整える。写真。付き添いの橋本が徳地のジャージを片付けていた。



徳地はこれから走るコースをランニングして、ウォーミングアップ。今年から往路の一部でアップができるようになったという。

9:01

「トップが残り1キロ」のコールが入った。「用意をしてください」。

9:04 山本が5位でゴール。タスキを受けた徳地が勢いよく飛び出した。

★ ☆ ★ ☆

「まずまずだった」と山本

記者の池内は1区を走り終えた山本のとを追った。山本は、記者が選手待機場所のテントに到着する頃

にはすでに息切れもなく、すっきりとした表情を見せていた。

「思った通りには走れました。本当はラストにもう少し頑張ればよかったというのが反省点です。でもまずまずの走りでした」と山本。

昨夜は眠れましたか？と聞くと「夜8時に就寝、朝3時に起床。コンビニのご飯が調整しやすいので、コンビニでスパゲッティやおにぎりを買いました。（食べ物の）組み合わせはめちゃくちゃんだけど、炭水化物をとるのが一番だと思って」と淡々と話してくれた。

小栗監督は「まずまずの結果でした。最後に山本の切り替えが必要だったとは言えるかな。最後、5秒差だった。あそこで先頭についていければ良かったですね」。

★ ☆ ★ ☆

2区、トップは3人の集団。徳地は5位をしばらくキープする。だが、6位の山梨学院・モグスがすごいスピードで距離を縮めてきた。1・7キロすぎ、モグスと中央学院・木原真佐人に抜かれ、徳地は7位へ。だが、6位との差はなく、横浜駅前を通過。徳地は両手をやや下げたフォーム



2区・徳地悠一

で、自分のペースでピッチを刻んでいく。14キロ手前で、ハイピッチで追い上げてきた日大・ダニエルに抜かれ、10位に。

このあとも快走を続けたダニエルは、ゴボウ抜きタイ記録の15人抜きを達成。それでもモグスに次ぐ区間2位だった。

「上野が風邪気味」とテレビ解説

残り3キロを切り、3区の戸塚中継所が近づいてきたときに、日テレのスタジオで解説している中大OBの碓井哲雄さんが「上野君が風邪気味なんですよ」と紹介。大手町の

スタート時を取材していた記者は、「3区を走る上野が風邪をひいたらしい」という気になる情報をキャッチしていたが、それが本場になった。上野は絶対的なエース。気がかりだ。いったんは10位に後退したものの徳地は、後半、粘り強い走りを見せ、最後に踏ん張って順位を上げた。

△戸塚中継所▽

（3区戸塚・平塚21・5キロ）

午前8時、3区を走るエース上野裕一郎（法4）が中継所に姿をみせた。遠山翔太（文3）が付き添っている。選手通過予定時間の2時間前だ。ライバルの早稲田・竹沢健介も揃う。テレビ関係者の出入りが激しい。記者の野村もその中にいた。

10:00 各大学の走者が緊張した面持ちでアップを始める。風邪

気味で熱があるという上野は、それでもリラクセスしているようにみえる。

10:10 山梨学院・モグスが1時間6分23秒の区間新記録でトップ通過する。

10:13 徳地が東京農大・外丸和輝と競り合いながら戸塚中継所

に入ってくる。最後数メートルで外丸を抜き、7位で上野にタスキを繋ぐ。徳地のタイムは1時間9分26秒。初の「花の2区」で区間9位。トップとの差は3分01秒差。

目標タイムをクリアした徳地

そのとき、箱根・芦ノ湖に向かっている『強くする会』のバス車内では、「徳地よく頑張ったね!」「大丈夫!」と、拍手が起こった。

翌3日、復路の戸塚中継所に姿をみせた徳地に、記者の竹下が前日の走りについて聞くことができた。

徳地は「目標としていたタイムはクリアできた。他大のエース級の選手たちと競って走れたことは貴重な経験でした」と振り返った。そして

「実は、夏の時点で、監督から『2区はながあってもお前で行く』と言われていました。これは去年、（裏の2区）9区（区間3位）をしつかり走れたこと、春の大会で他大のライバルにも勝てる力があることを示せたからだと思えます」と自らを分析した。

4月に最上級生になる徳地は新主将を託された。チームを引っ張る責

任が加わる。すでにその自覚はできている。

★ ☆ ☆ ☆
体調不良が伝えられる3区上野。だが、出足は軽快だ。

4キロ手前で、前を行く6位の東洋・若松儀裕を抜き、落ち着いた走りだ。ただ時折、鼻を気にする仕草をみせる。

藤沢市の遊行寺手前の下り坂で、駒澤、日大、東海を抜き、一気に3位にあがる。

9キロ手前で、日テレ中継車の瀬古さんが「上野君、風邪ですか?」と、スタジオにいる碓井さんに問いかける。「37度ちよつとだから、大した風邪じゃないよ」と碓井さん。「彼は宇宙人だから」と瀬古さんは珍妙な解説。

やはり上野の体調が不安だ。

田幸監督が突然、上野に給水

10:41 9・5キロすぎ、田幸監督

が突然、運営管理車を降りた。上野に水を渡す。しばらく前から、上野が手を挙げて何か合図する様子が増えていたが、どうやら給水を求めて、運営管理車を呼んでいたようだ。



3区・上野裕一郎

給水で息を吹き返したのだろう。

12キロ付近で、上野は中央学院・堀宏和を抜いて2位にあがった。しかし、堀はびったりついてくる。

15キロをすぎた大磯サザンビーチ周辺で上野を待ち構えていた給水係の齋藤勇人(商1)は、水を与え、「残り5キロ、粘っていきましょう」と上野に大きく声をかけた。上野は手を振って、応えた。

あとで齋藤は、「あのあたりの余裕や気遣いが上野先輩ならではです。前の日は熱もあり体調が悪そうでした。配でしたが、さすが上野さんだと思います」と話してくれた。

残り3キロ、踏ん張っていた上野に疲れがみえる。突然、ペースダウン。びったりつかれていた堀について2位を譲り、3位に。20キロ手前で上野は苦しい走りになり、堀との差が70秒ほどに広がる。

〈平塚中継所〉

(4区平塚〜小田原18.5キロ)

平塚中継所では記者の竹下が上野を待ち構えた。沿道の両側には大変な人垣ができて、先を見通すことができない。なんとか状況を掴もうと、記者はラジオを片手に右往左往する。

10:55

4区の森誠則(法3)がアップしている。青柳和也(総政

3)が付き添っている姿が見える。ストレッッチで身体を解す。中大の赤のジャージが目に見えやかだ。

後に青柳に話を聞くと、「本人(森)は緊張したと言っていたが、自分の目には普段通りに見えました。あとは力を出すだけの状態。早く走り始めたという様子でした」と話してくれた。

11:05

上野に異変か。18キロ地点で突然のペースダウンが伝えられる。駐車場に設置された巨大モ

ニターで現状を把握する。

しばらくして、一斉に観衆のボルテージが上がる。中継所に1位の選手が入ってきたのだ。山梨学院・田中僚が風のように飛び込んできた。

11:18

上野は2位と10数秒という僅差で、タスキを森に渡した直後、路上に仰向けに倒れこんだ。その瞬間、ギャラリイからは「ああ……!!」という悲鳴にも似たため息が漏れる。黄色いベンチコートに身を包んだ学連のスタッフが上野を運ぶ。

記者は後を追った。

体調不良でも上野は区間2位

上野は運ばれた先でうつ伏せになっっている。報道陣が群がる。しばらくして上野が着替えを終え、立ち上がると、囲むようにして一緒に移動していく。このあと上野は、脱水症状で小田原市内の病院に搬送された。

上野の記録は、1時間3分52秒。ライバルの早稲田・竹沢には届かなかったものの、区間2位だ。体調不良でなかったらと、悔やまれる。付き添いの青柳はモニターをじっ

と見つめ、森の走りを見守っていた。落ち着いたところを見計らって記者は、青柳に上野の様子を聞いた。

「ぐったりして、しゃべることもおぼつかないような感じだった」と青柳。4区の森への影響を尋ねると、「上野さんの苦しむ様子を見て、森は頑張っていこうと思ったのではないでしょうか」と頼もしい答えが返ってきた。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

トップ山梨学院と1分57秒差、2位中央学院と13秒差でタスキを受けた森。昨年12月14日の記者会見で、「前回はシード権争いでテレビに映ってしまったが、今度は優勝争いで映りたい」と話していた。そのチャンスがきた。

森は2位中央学院・小林光二との差をどんどん縮める。5メートル、2メートルに迫り、3・5キロすぎでついに抜き、2位にあがった。

しかし、小林も粘る。わずか1メートル差をキープしてついでくる。二宮でつかれて、ほぼ並走。2、3位争いをしていううちに、トップ山梨学院との差は1分21秒にまで縮まった。



4区・森誠則

4区森、順位ひとつあげ2位

15・4キロ付近の酒匂橋、森は苦しそうな表情にかわり、歯を食いしばる。わずかに先に出るも、すぐにまた抜かれる。抜きつ抜かれつの2、3位争いが続いた。

残り1キロを切り、タスキをとった森。うしろには東洋・今堀将司も迫ってきていた。あと100メートルのラストスパートで前に出た森は、2位と順位をひとつ上げて、5区の梁瀬峰史（法2）にタスキをつないだ。トップ山梨学院とは、1分02秒差。

森は区間7位。

〈小田原中継所〉

（5区小田原／箱根23・4キロ）

記者の橋本は、小田原中継所のメガネスーパー本社前に午前10時40分に着き、周辺の取材をはじめた。小田原駅から中継所まで走ってきた橋本の顔には、うつすらと汗がにじむ。好天で、日差しが強い。果たして箱根の山はどうなのだろう。寒暖の差は、山をのぼる5区の選手たちには厳しい条件に違いない。

メガネスーパー駐車場が選手の待機場所になっていた。奥の方にチラッと中大の赤いジャージが見える。ニット帽を深く被った付き添いの山田雄司（総政1）がいる。記者が入れるのはここまでで、規制ギリギリの場所から続きの動きを追った。

11:00 応援団による太鼓がはじまった。周りを見ると、プログラム売り場にコーヒーマシンの売店、それに温かいお粥のサービスもある。箱根への起点、小田原ならではの。

11:12 5区梁瀬がメガネスーパー下から出てきた。周りをゆつくり見渡した後、アップの場所へと

向かった。通過およそ1時間前でも大変な人だかりである。

11:30 梁瀬がアップから戻ってきた。何かを取りにきたのか、またすぐにアップに戻っていった。表情は固くもなく、焦っているようでもない。

11:54 大会関係者から「準備してください」のコール。梁瀬、付き添い山田、副主務の井上洋平（商1）の3人がメガネスーパーに戻ってきた。山田は携帯電話で話をしており、それを梁瀬に渡した。梁瀬が携帯で話をしている。田幸監督からの連絡だろうか。

12:02 「1位選手が間もなく通過します」の声。メガネスーパー下から遅れて出てきた梁瀬は、東洋・釜石慶太と雑談。お互いよく知る仙台育英高の同期生だ。

12:13 1位の山梨学院が通過。緊張が高まる。

12:15 中大のタスキが梁瀬に渡った。

★ ☆ 山登りの5区。標高差864メートルを駆け上がる。5・4キロの箱根湯元駅を過ぎたあたりから約13キ

ロの曲がりくねった上りの厳しい山道との格闘が続く。しかも5区は最長区間である。「天下の険」を制するには、心身ともにタフさが要求される。

ぶっつけ本番の山登り、梁瀬

梁瀬は順調に飛び出した。自分のリズムでピッチを刻んで行く。ただ、2位でタスキを受けたとはいえ、小田原でのタイム差は3位中央学院とは4秒、4位東洋とは11秒、5位駒澤とは13秒という僅差。6位の早稲田でも25秒差だ。

3キロすぎで、梁瀬は追い上げてきた駒澤にかわされ、3位に。7キロで、好調な走りの早稲田・駒野亮太に抜かれ4位、9キロ手前では中央学院に抜かれて5位に下げた。

14・3キロの小涌園前では7位に。うしろには日大、亜細亜が迫っていた。

梁瀬はこの日、森山昇人（文1）からエントリー変更された。実は田幸監督が5区に起用を考えていたのは大石港与（法1）だった。大石は1年生ながら山登りのスペシャリストとしてトレーニンングを重



5区・梁瀬峰史

ねていた。5区のぼりのコースを5、6回は練習で走破し、好記録を残してもいた。

10日ほど前に、その大石が胃腸炎を起こして吐いた。徳地がそうだったと同じように、感染したらしい。

そこで急遽、抜擢されたのが梁瀬だった。しかし、梁瀬が5区を走ったのは、たった1回だけ。中大では1年生は入部当初に全員が5区を走るのが恒例になっており、梁瀬はそのときの経験しかない。

5区を走ることになった梁瀬は、大会直前に車で2回コースを下見す

るのがやつとだった。山登りはぶつけ本番だったのである。

△箱根・芦ノ湖往路ゴール▽

東京・大手町から108キロ。建物と建物に挟まれた芦ノ湖畔のゴールは幅5メートルあまりだが、その周囲をのぼりを持った『箱根駅伝を強くする会』のメンバーをはじめ何重にも人垣ができていた。記者の



滝沢は、芦ノ湖に先回りして梁瀬のゴールを待った。

毎年、芦ノ湖で「中大、頑張れ」

ゴール近くの大型マルチビジョン

でテレビ中継が流れるなか、スポンサー企業が配るトン汁のいい匂いが辺り一帯に流れ、空腹をくすぐる。ゴールの1キロ手前付近から応援団やチャリダーによる応援合戦が繰り広げられる様子は、さながらもうひとつの戦いだ。

マルチビジョンには早稲田・駒野の姿が、映し出されている。小田原中継所の6位から、一気にトップに躍り出たのだ。

13:00

「早稲田大学がトップです」との放送がゴール付近に流れた。マルチビジョン前で観戦していた『箱根駅伝を強くする会』が



作成したCマークの小旗を持った7人グループ。写真からは、「中大の姿が全く見えないな」という声が漏れた。

「毎年のようにゴール地点の芦ノ湖で中央大学を応援しています。息子が大学受験の際に中大を受験してから、毎年のように『中大頑張れ』とエールを送っています」と神奈川県川崎市の佐藤真里さん(56)。

お気に入りの選手を聞くと、「箱根駅伝を特集した暮れのテレビ番組を見てから、上野選手が今まで以上に好きになりました」。親戚一同で箱根に遊びに来て、毎年、中大を応援しているという。「もう少し頑張ってくださいのですが」と、厳しい声も。

マルチビジョンにゴールまで残り3・5キロ地点を走る早稲田・駒野が大きく映し出されるころ、ゴール付近は膨れ上がった人垣で身動きが取れなくなってきた。「トップの早稲田大学は残り1・5キロ」という再びの場内放送のあと、最後に「10位中央大学」のアナウンス。

スクリーンを神妙に見つめる3人の現役中大学生がいた。「中大スポーツの同期3人で毎年来ています」。



(10位という放送を聞いて) すごくシヨックですが、まだ復路がありませんから」と笑顔を見せたのは、中大スポーツ新聞部前編集長の相原舞子さん(文4) Ⅱ写真Ⅱだ。

★ ☆ ★ ☆

1区の山本、2区の徳地を含めた選手やスタッフがゴール地点に集まってくる。「上野さんは体調が悪いから来ないようです」との声が聞こえてきた。後でわかったことだが、上野はこのとき小田原市内の病院に脱水症状で搬送されていた。

10位梁瀬を労わるチームメイト

13:33 早稲田がトップでゴール。中大選手団のひとりが「まさ

か、3分は離れないだろう」とこぼした瞬間、その前を走り終えた早稲田・駒野がチームメイトに両脇を抱えられながら横切った。赤いウィンドブレーカーを着た中大選手団はちらりと目をやるだけで、口を真一文字に結んだままだ。

13:39 トップ早稲田に遅れること5分55秒、梁瀬が10位でゴール。倒れこむ梁瀬を小栗監督や1区

を走った山本庸平らが抱きかかえたⅡ写真。チームメイトの選手からは



「疲れただろう」「暑いだろう」と労う声が掛けられた。

★ ☆ ★ ☆

ゴール付近の芦ノ湖畔には中大選

手団が田幸監督を中心に集まった。「梁瀬は登りになって力が入っていなかった」と田幸監督。箱根駅伝記念碑前でのご報告会Ⅱ写真Ⅱに臨んだ田幸監督は、応援してくれたOB・OGや大学関係者を前に、「本日の成績はみなさんの期待に添えなかつ



たかもしれませんが、選手たちが頑張った結果です。明日も前へと頑張ります」と選手を労わりながら、復路に眼をはずした。

「もう落とせない」と山下主務

山下主務は、記者に「もう落とせ

ないところなので頑張ります」と復路での巻き返しを誓った。

△箱根・芦ノ湖▽

(6区箱根〜小田原20・8キロ)

1月3日朝。箱根・芦ノ湖は気温マイナス4・2度、晴れ。新春の陽光が湖面を照らす。往路10位の中大はシード権落ちの危機を背に、復路に臨む。

8:00 8…00 往路トップの早稲田が芦ノ湖をスタート。その後1分14秒差で駒澤、続いて1分59秒差で山梨学院が追う。

8:05:55 早稲田がスタートした5分55秒後、10位中央がスタート。田幸監督は、エントリー変更で主将の森宗信也(法4)に復路挽回の足がかりを託した。サンダグラスをつけた森宗は、大きく手をだらりと下げて、勢いをつけて走り出した。

★ ☆ ★ ☆

森宗にとつて最初で最後の箱根だ。12月14日の記者会見で、「筋力とスピード」が自分の走りの売りで紹介し、「プレッシャーに強くなった」と自信をみせた森宗。その言葉通り、箱根の山を急ピッチで駆け下り、前を



6区・森宗信也

行く9位東洋と芦ノ湖で40秒あった差を縮めていく。

9・1キロの小涌園前を10位で通過。順位は変わらないが、着実に前を追う。大平台を通過。この時点で、区間賞をとったトップの早稲田・加藤創大との差は7分13秒に広がった。「僕が口で引つ張るタイプではないので、上野がみんなを引つ張ってくれる」と語っていた森宗。主将として自分自身の走りをみせて順位を上げる場面だ。

8位にあげ、主将魂みせた森宗

安定した走りで森宗は、終盤に東

洋と亜細亜を抜いて8位に順位をあげ、主将魂をきっちりみせた。

〈小田原中継所〉

(7区小田原〜平塚21・3キロ)

復路の小田原中継所は鈴廣の蒲鉾ミュージアム前。選手通過の2時間前すでに100人前後が治道に椅子やマットを置いて選手の通過を待っている。

7区を走る関敏則(法4)

7:20

がアップから戻りワゴン車に乗り込む。昨年はエントリーされながら直前で涙を飲んだ。12月14日の記者会見で「ベストを出せるように頑張る」と語った関の初の箱根にかける想いは強い。

付き添いの門屋恒彦(文4)は、「昨日のオーダーを見れば選手層が完璧でないことはわかったと思います。関の起用も急に決まりました。関は4年で初めての箱根で緊張しています。監督からは『多くは求めないから、走って来い』と言われて今朝は宿舎を出ました」と中継所の規制線前で、記者の滝沢に語ってくれた。

女子マネージャー2人が治道に立っていた。半田歩(経4) || 写真右 || と田中里永子(法3) || 写真左



|| は、「マネージャーの主な仕事はタイムの計測などです。私たちのメイン担当は藤沢ですが、時間が十分にあつたので森宗さんの応援に来ました」。手にしたスケッチブックには「頑張れ」の文字が大きく書かれていた。

ランニング姿の関が建物内から中継所に現れた。サンダラス下の表情は、どこか固い感じだ。

8:50

トップ早稲田が7区のランナーにタスキを渡す。

9:05:28
関は水を口に含むと上空を見上げて、うがいをする。7位の日大がタスキを渡した後、

白地に赤い「C」の文字を身につけ

た関が出てきた。足を手でたたく。両足でジャンプをする。手を胸にあてて、なにかを祈るようなしぐさを見せた。

ラストスパートをかけた森宗が見えてきた。

森宗は大きく広げたタスキを渡し、関の左肩をポンと叩いて倒れこみ、介助者の腕におさまった。森宗は順位を8位にあげ、シード権争いから抜け出す足がかりをつくった。

「結果に満足していいな」と森宗

鈴廣地下駐車場にしつらえられた選手待機場所。中大の待機場所はトップ早稲田の隣にあつた。足元に目をやると、森宗と共に箱根の山を下った白地にブルーのラインが入ったシューズがきれいに並べてあつた。着替えを終えた森宗がホッとしたのか、チームメイトにはにかなだ笑顔を見せる。

「順位を上げることはできたが、目標タイムには届かなかつたです。最初で最後の箱根駅伝だったが、結果に満足はしていません。直前まで他の候補選手と争い、12月30日に監督から『6区を走れ』と指名されま



7区・関敏則

した。おそらく調子が良かったのだ、今のチームには復路を走った経験者がいなかったからだと思います。監督からは『4年生として全力で走ってこい』と送り出されました」

森宗は、記者の滝沢にそう静かに語ると、雑踏の中に消えていった。

★ ☆ ☆ ☆

関は、山脇和真（法3）からのエントリー変更。最終学年になり、初の箱根だ。

8位でタスキを受けると、前を行く日大を追った。だが、9位の垂細亜に追いつかれて、並走。13・3キロ付近で抜かれ、疲れが見え始めた関は、徐々にペースダウン、大磯

あたりでは帝京と9位争いに。

関、シード権争いで粘りの走り

激しいシード権争いが続き、関は順位を二つ落としたが、懸命の走りをみせた。

トップ早稲田との差は、8位帝京が8分24秒、9位日大が8分33秒、10位中央が8分49秒で、25秒差の中に3チームがいるというサバイバルの団子レースになった。

〈平塚中継所〉

（8区平塚〜戸塚21・5キロ）

選手通過予定時間のほぼ2時間前、記者の池内と野村は最寄り駅、大磯駅に着き、15分をかけて中継所まで歩いた。早くも沿道には、ずらりと観衆が並んでいる。

近くのコンビニをのぞくと、ホットカイロが積まれていた。海が近く、風は冷たい。店の人に確認すると、「いつもより多めに置いてありますよ」とのことだった。

選手待機場所の駐車場には、それぞれの大学のビニールシートが並んでいる。8区を走る山下隆盛（法1）についている付き添いの久保田康友

（法1）に会うことができた。

「今日は4時半起きでした。選手は、自分で起きる時間を決めています。バスでホテルを出発して、さきほど到着しました」と久保田。

8:40 山下⇨写真左⇨と付き添いの久保田⇨同右⇨にはあまり



会話はないが、一緒にタスキを受ける位置を確認する。山下は気を一点に集中させるように、奥でストレッチをはじめた。

山下が足にクリームを塗りこんでいる。スネに細長いテープが片足にピッシリ10以上あった。磁気が入っているテープのようだった。太ももにはスネとは違う丸型の磁気テープ

を張っていた。見えただけでも片足に3つずつはある。

9:05 浦田春生コーチがラジオを聞きながら、メモをとる。顔は険しい。

は険しい。

9:13 「9時45分にコールを行います」とアナウンス。山下は大磯海岸沿いを走り、アップを始めた。あつという間に姿が見えなくなる。素人目には本番さながらのス

ピードにみえたが、付き添いの久保田は「25分の長いアップはいつも通り。速さは本番とはぜんぜん違いますよ」と教えてくれた。

10:13 関が10位で中継所に飛び込んできた。

★ ☆ ☆ ☆

10位とシード権ぎりぎりです。タスキを受けた山下。もちろん初の箱根だ。高校時代に経験した距離の2倍を走るが、「大学に入りスタミナがついた」（12月14日の記者会見）と自信をつけた山下。海岸沿いに平坦な道のりが続く序盤は、焦らずに自分のペースで走る。

8区山下、ひとつあげて9位

12キロ付近から帝京、日大との三



8区・山下隆盛

△戸塚中継所▽

（9区戸塚〜鶴見23・2キロ）

戸塚中継所の付き添いは橋本雅史（経3）。前日の往路で「花の2区」を走った徳地悠一とともに山下を待つ。9区の平川信彦（総政3）は臨戦態勢に入っている。

記者の竹下と山崎は、走る前の平川に体調を聞くことができた。

10:00

「朝は少し食欲がなかった」という。今のところは（シード権）ギリギリなので、守るっていう軽い目標じゃダメだと思うので、シード権を確保し、ひとつでも上を目指して、来年につながる走りをしたいです」と力強いコメント。

「力を発揮さえすればと信じています。仲間？寮を出発したときに声を掛け合ってきましたよ」と話してくれた。徳地からも心境を聞いた。「9区は勝負どこなので、来ました。シード権の圏内でアンカーへつなげていくのが大事。（8区の）山下は大学に入って初めての駅伝。どんな順位でかえってきてても『頑張った』と言っ

て、労わりたいですね」。

付き添い橋本が山下に「お疲れ」

歩道も人で埋まり、移動は出来ないう。人垣は、道路側から数えてみると6層にまでなっている。白バイが集まり、通行中の車に「まもなく選手が通るので、速度を落とさずに進んでください」とアナウンスしている。

11:11 中継所にトップ早稲田・飯塚淳司が入ってきた。駒澤が15秒の差で追う。

11:21 中大が見えた。あともう少し。平川が山下に向けて大きな声を出した。中大のタスキが順位を1つ上げ、9位でリレーされる。

8位帝京とは50秒の差。後ろからは15秒差で10、11位の東洋、大東文化が迫る。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

付き添いの橋本は山下の走りについて、記者の竹下に「大事な区間でしたが、信頼できるので安心して見せていました。緊張もあまりしていませんでしたし。1年生ながら、最低限の仕事はきっちりしてくれたと思います」と語り、シード権を死守した山下に「お疲れ」と声を掛けた。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

昨年は補欠に回った平川は、暮れの記者会見で「去年、先輩に『一番悔しい思いをしたのはお前だ』と言われた。これをバネにして、1年間頑張ってきた」と捲土重来を約していた。「ひとつでも順位をあげる」、その思い出で前を行く8位帝京を懸命に追う。

前日に熱を出し、体調は万全ではなかった。12キロ手前で10位争いの日大、東洋が追い上げてくる。シード権争いがますます混沌としてきた。平川は、残り5キロの横浜駅前を依然として9位で通過。しかし、平塚中継所で50秒あった8位帝京との差を11秒にまで縮めた。

意地の走り平川、8位でつなぐ

懸命の走りです平川は帝京・小田鎌徳に迫り、ついに抜いて8位に浮上した。

中大は23年連続でシード権を守り続けている。24年ぶりのシード権落ちの屈辱を味わうわけにはいかない。真紅のタスキには「伝統」と「歴史」が染み付いている。

平川は意地の走りで、タスキをつ

つ巴となったシード権確保の熾烈な争いが続く。

13. 3キロ過ぎ、日大が遅れはじめた。山下と帝京・大脇佑介が離す。山下が帝京をかわし、いったんは8位にあがった。

15キロの給水ポイントで、給水係の齋藤勇人（商1）は、山下に「頑張れよ」と声をかけたが、反応はなかった。齋藤には山下が「苦しそう」にみえた。

シード権争いから一步抜け出したかみえたが、終盤になって山下は帝京に抜き返されて9位に。

なげた。



9区・平川信彦

△鶴見中継所▽

(10区鶴見〜東京23・1キロ)

10時すぎには、すでに中継所の付近には大学名が書かれたテントがたくさん張られていた。

11:15 付き添いの加古穂高(経4)が到着。選手待機場所近くに

備え付けられた小さなテレビに映る中継を、選手、関係者、そして一般客らに混じって観戦している。加古はレース後、記者の駒田に「シード権ぎりぎりのところだったので、細

かく情報を伝えることに心がけた」と話してくれた。

11:15 10区の加田将士(経4)が、加古とテレビ中継を見ている。あまり緊迫感はなく、リラクセスした表情で順天堂の選手らと談笑している。

その頃、沿道では箱根駅伝公式グッズ売り場が盛況だった。各大学のロゴ入りのタオル、ストラップ、箱根駅伝ロゴ入りのボールペン等が販売されていた。色々な大学のタオルをまとめ買いする人も多く見られた。

記者の橋本と駒田は、中大タオル3枚と中大ストラップを複数購入していた中大OBに話を聞いた。「なかなか厳しい状況だけど、どうにかシード権には入って欲しいものです」と、OBは厳しい表情で話した。

11:50 沿道の観客が、急激に増え始めた。中大の選手らはテントの前で談笑している。

11:55 「選手は移動よろしくお願ひします」というアナウンスが流れる。

12:11 監督からだろうか。加田が携帯電話で話をしていく。

10数分後、平川が順位をひとつあげて8位で中継所に入ってきた。

★ ☆ ★ ☆

10区加田、区間4位の好走

アンカー加田は8位でタスキを受けたが、9位東洋との差はわずかに7秒。10位帝京は15秒差で追ってくる。シード権確保をめざし、ひたひたと迫る後続ランナーに緊張を強いられながらも、加田は「やるべきことはすべてやった。しっかりチームに貢献したい」と記者会見で語っていた通りに、粘り強い走りを見せた。



10区・加田将士

新八ツ山橋を過ぎても加田は8位をキープ。しかし、9位帝京、10位東洋、11位日大との息詰まるシード権争いが続く。

20キロを過ぎた銀座付近で、前を行く7位東海・荒川丈弘に異変が起きた。足に痙攣を起すアクシデントに見舞われて途中棄権、レースから脱落したのだ。

これで途中棄権したのは、往路の順天堂(5区)、復路の大東文化(9区)に次いで過去最多の3校となった。好天による気温の上昇もあってか、いずれも選手は極度の脱水症状などでレースを断念せざるをえなかった。

給水は各区15キロ地点で1回認められているが、往路で順天堂が棄権したのを受けて、往路終了後に緊急に開いた監督会議で、「復路は、同伴する監督の判断により、指定場所以外の任意の1カ所で給水できる」ことを決めた。しかし、それでも棄権する選手が出て、体調管理に課題を残した。

終始、落ち着いた走りを展開した加田は、7位でゴールテープを切ったII写真左ページ上。区間4位の好走だった。飛び込んできた加田の肩



学生記者取材班は、フィニッシュを見届けようと、担当した各中継所から電車を乗り継いで大手町のゴール地点に参集したが、大手町一带は「ハコネ・ファン」で異様に膨れ上がった。ゴールを見極めようと試みるも、ぎっしりと埋まった人出にさえぎられ、取材をはばまれる。

しばらくして、選手団待ち合わせ場所となった読売新聞社1階ロビーに、フィニッシュした加田の姿をみつめた。表情には、責任を果たし、ホッとしたのだろう、時折、笑顔がこぼれる。加田を労わるように囲む小栗監督や選手たちにも安堵した様子がみえる。

△大手町ゴール▽
 中大の総合成績は11時間15分00秒の7位（往路8位、復路10位）。昨年より順位をひとつあげ、23年間守り抜いてきたシード権を確保した。

万全の態勢で臨んだ「ハコネ」ではなかった。体調不良者が相次ぎ、不安をかかえてのレースだった。シード権落ちの危機を感じていたのだろう。そんな状態でも「伝統」

と「歴史」ある真紅のタスキをつなぎ、中大の底力を示すことができた。「頑張ることができた」。選手たちの表情からは、そんな気持ちが見取れた。

★ ☆ ☆ ☆ ☆

「期待に沿えず」と田幸監督

レース終了後、日本橋の常盤橋公



園で恒例となった「選手を称える会」が「写真」大学関係者はじめ、「箱根駅伝を強くする会」のメンバー、それに応援してきた中大OB・OGらが大勢参加して行われた。

応援歌の後、挨拶に立った鈴木敏文理事長は「今年も昨年同様にどうなるか不安でしたが、最後に伝統校の意地を見つけたレースでした。来年度からは学校としても陸上部を予算面でバックアップする体制を始めます。2010年、創立125周年での総合優勝という夢に向って頑張りたい」と駅伝チームを全面的にバックアップする考えを明らかにした。

続いて挨拶した永井和之総長・学長も、「今年はず年の8位に比べて、ひとつ順位を上げた。4月からは予算も増額、本格的に駅伝に力を入れていきたい」と駅伝強化策を力強く約束した。

これに答えて田幸監督は、次のようにレースを振り

返った。「皆様のご期待に沿えるものではなかったと思いますが、チームとしても突然の区間変更や体調が悪かった選手がいたことも事実です。しかし、シードを取ることができたのはみなさんの応援の力があってこそだと思えます。選手を万全の体調に仕上げることができなかったのは指導者である私の反省点です。こうした点を踏まえて、今後もしっかり精進していきたいと思えます」。

このあと常盤橋公園からほど近いパレスホテルで、恒例の『中央大学陸上競技部OB会』主催による慰労会Ⅱ写真Ⅱが行われた。

中大駅伝をこよなく愛す親子

この席で、取材班は中大の駅伝の応援に心身ともに捧げる親子に出会った。駅伝チーム女子マネージャーの魚島一葉（文1）と陸上競技部OBの父親Ⅱ写真下Ⅱだ。

「小学校1年生のときに父に箱根に連れてきてもらったのがきっかけで、今ここにいます」という魚島に話を聞いた。

「父が中大陸上部のOBで、家族で箱根駅伝を見に行きました。小学生なりになんとなく感動した覚えがあります」。その後、高校1年の時にも友達家族と再び箱根へ観戦に行った。「その時にとっても感動して、私も駅伝に携わりたいと思いました」。

どうせやるなら駅伝の強い大学で、と大学進学は中大を目指したが失敗。浪人した2年目にも失敗してしまい、駒



澤大学に入学することになった。

「駒大でマネージャーをしようと思った。しかし入ってみると、マネージャーは各学年1人と決まっています。競争率が激しくて結局なれなかつたんです」

陸上部に入りたくて入学したのに、それが叶わずに悩んだ。「両親と相談して、1年間仮面浪人のような形で勉強をしました」。そして次の年に中大に晴れて入学し、陸上部のマネージャーになった。

「高校の頃からの思いが現実になって、ここにいることが夢のよう

です。まだまだ未熟ですが、選手の信頼を得るために全力を尽くしたいです。そのために中大に入ったのだから。駅伝が好きだという気持ちと親を喜ばせたいという気持ちがあったから、ここまでこれました」

「中大に合格したとき、父はうれしくて泣いちゃったんですよ」という魚島の隣で、父親は「結果を知ったときには、かみさんと2人で号泣ですよ」と言って、表情を崩した。

「マネージャーになって、正月に娘が家に帰ってこないのは少し寂しいですけどね（笑い）。でも親子で一緒に喜べるものがあるのはありがたい。娘が卒業しても一緒にOBとしてハコネを応援できるから嬉しい」

ここにも中央大学の駅伝を支えるひとつの「タスキリレー」があった。

学生記者取材班

橋本奈緒美（大学院理工学研究科博士1年）／滝沢孝祐（総合政策学部・今春卒）／池内真由（法学部4年）／竹下奈穂（経済学部4年）／山崎綾香（法学部4年）／駒田恵（法学部3年）／野村茉莉亜（商学部2年）